みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Minpaku Tsushin no.161; Cover, Contents, and others

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-07-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009099

民博通信

評論・展望

東日本大震災以降の災害研究

人類学と他分野との協働に向けて

林 勲男

No.161
2018

国立民族学博物館

民博通信 2018 No.161

ISSN 0386-2836

No.161

目 次

評論・展望

国立民族学博物館の研究 03

東日本大震災以降の災害研究
——人類学と他分野との協働に向けて
林　勲男 04

研究プロジェクト

データベース構築にむけた資料情報の整理
基幹研究●アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築
飯田　卓 10

知的興奮を惹起するトランスフォーマティブ研究
共同研究●会計学と人類学の融合
出口正之・早川真悠・大貫　一 12

身近なネオリベラリズムについて考える
共同研究●ネオリベラリズムの中のモラリティ
田沼幸子 14

文化人類学を自然化する方法にむけて
共同研究●文化人類学を自然化する
中川　敏 16

フィールドでパフォーマーになるという経験から
——ミュージッキングにおける「参与」
共同研究●音楽する身体間の相互作用を捉える——ミュージッキングの学際的研究
野澤豊一 18

視覚障害者の絵画鑑賞——「副触図」の可能性
共同研究●「障害」概念の再検討
——触文化論に基づく「合理的配慮」の提案に向けて
広瀬浩二郎 20

コーヒー文化から、移動戦略を浮き彫りにする
共同研究●物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究
縄田浩志 22

出版物

東南アジアのポピュラーカルチャー
——アイデンティティ・国家・グローバル化
福岡まどか 24

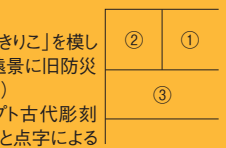
海民の移動誌
——西太平洋のネットワーク社会
小野林太郎 25

研究情報

研究成果の公開 26

みんぱくのうごき 27

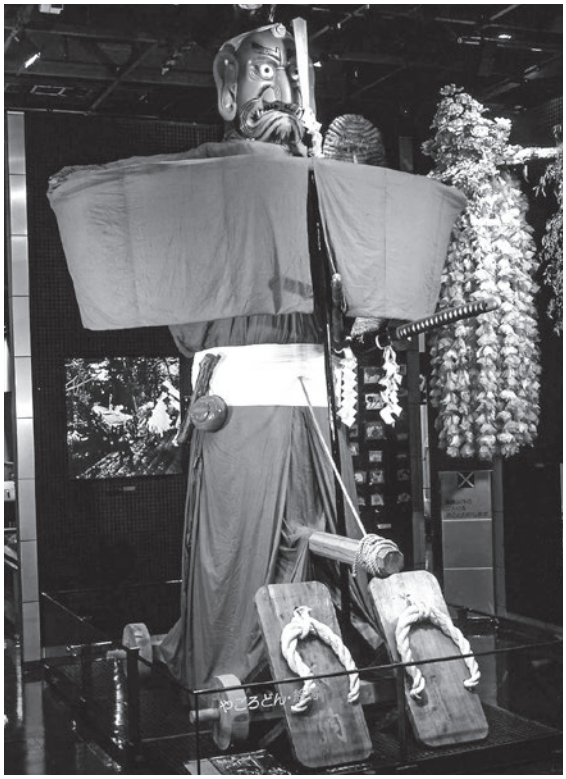
表紙写真



①半紙で作る神棚飾り「きりこ」を模したアートプロジェクト。遠景に旧防災対策庁舎（本誌4-9頁）
②大英博物館の「エジプト古代彫刻ギャラリー」にて。触図と点字による解説を参考としつつ、彫像に触れて鑑賞することができる（本誌20-21頁）
③ジムナスティック（乳児を抱き上げ、立位を保持、あるいは上下運動させる一連の運動）を行なうクンの女性（本誌16-17頁）

民博通信 No. 161

『民博通信』は、国立民族学博物館の研究広報誌です。本館において、現在計画中、および進行中の研究について、その学術的な特色、独創的な点、期待される成果などを、研究者を中心に広く発信するのが目的です。



国立民族学博物館東アジア＜日本の文化＞展示場　やごろどん人形

民博通信　No.161
2018 年 6 月 29 日

編集委員
藤本透子（編集長）
卯田宗平
伊藤敦規
宇田川妙子
三尾　稔

編集・発行
人間文化研究機構　国立民族学博物館
〒 565-8511
大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話：06-6879-2151
http://www.minpaku.ac.jp/

制作
毎日新聞大阪本社 大阪事業本部

国立民族学博物館の研究

【基幹研究プロジェクト】

人間文化研究機構は、人間文化の新たな価値体系の創出をめざして、国内外の研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進します。機関拠点型・広領域連携型・ネットワーク型の3つの類型から構成され、本館でもそれぞれのプロジェクトに取り組んでいます。

【特別研究】

「現代文明と人類と未来―環境・文化・人間」を統一テーマとし、環境、食、文化衝突、文化遺産、マイノリティ、人口問題という課題にかんして、それぞれ3年の研究期間を設定し、国際シンポジウムや欧文での成果刊行を行い、研究を実施していく。その作業を通じて、現代文明を人類学的な視座から再検証することを目的とする。

【共同研究】

特定のテーマについて、公募も含めて館内外の専門家を数人から20人程度集めて研究会をひらき、2～3年の期間で成果をあげる活動です。2018年度6月現在は、24件の共同研究プロジェクトが組織されています。また、10月から新規の研究が開催される予定です。

【基幹研究プロジェクト】

プロジェクト名	研究代表者	研究期間（年度）
機関拠点型プロジェクト／人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築		
○開発型		
中央・北アジアの物質文化に関する研究――民博収蔵の標本資料を中心に	寺村 裕史	2018－2021
アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築	飯田　卓	2017－2020
民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討	齋藤 玲子	2016－2019
台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応	野林 厚志	2015－2018
○強化型		
民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築――オセアニア資料を中心に	丹羽 典生	2018－2019
ネパールのガンダルバ映像音響資料に関する情報共有型データベースの構築	南 真木人	2018－2019
中南米地域の文化資料のフォーラム型情報データベースの構築	八木 百合子	2018－2019
朝鮮半島関連の資料データベースの強化と国際的な接合に関する日米共同研究	太田 心平	2017－2019
中東地域民衆文化資料コレクションを中心とするフォーラム型情報データベース	西尾哲夫	2017－2018
広領域連携型プロジェクト		
文明社会における食の布置（「アジアにおけるエコヘルス研究の新展開」内のユニット）	野林 厚志	2016－2021
日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築（「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」内のユニット）	日髙 真吾	2016－2021
ネットワーク型プロジェクト		
北東アジア地域研究	池谷 和信	2016－2021
現代中東地域研究	西尾 哲夫	2016－2021
南アジア地域研究	三尾　稔	2016－2021

【特別研究】

研究課題	研究代表者	研究期間（年度）
パフォーミング・アーツと積極的共生	寺田 吉孝	2018－2020
食料生産システムの文明論	野林 厚志	2017－2019
生物・文化的多様性の歴史生態学――希少動物・希少植物の利用と保護を中心に	池谷 和信／岸上 伸啓	2016－2018

【共同研究】

●は館外の代表者

◎一般

研究課題	研究代表者	研究期間（年度）	
課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究			
ネオリベラリズムの中のモラリティ	田沼 幸子	2017－2020	●
人類学／民俗学の学知と国民国家の関係――20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス	中生 勝美	2017－2020	●
文化人類学を自然化する	中川　敏	2017－2020	●
現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究	浮ヶ谷 幸代	2016－2019	●
もうひとつのドメスティケーション――家畜化と栽培化に関する人類学的研究	卯田 宗平	2016－2018	
捕鯨と環境倫理	岸上 伸啓	2016－2019	
会計学と人類学の融合	出口 正之	2016－2018	
音楽する身体間の相互作用を捉える―ミュージッキングの学際的研究	野澤 豊一	2016－2019	●
「障害」概念の再検討――触文化論に基づく「合理的配慮」の提案に向けて	廣瀬 浩二郎	2016－2018	
考古学の民族誌――考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究	ERTL, John	2015－2018	●
医療者向け医療人類学教育の検討―保健医療福祉専門職との協働	飯田 淳子	2015－2018	●
確率的事象と不確実性の人類学――「リスク社会」化に抗する世界像の描出	市野澤 潤平	2015－2018	●
宇宙開発に関する文化人類学からの接近	岡田 浩樹	2015－2018	●
個－世界論――中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム	齋藤　剛	2015－2018	●
放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究	中原 聖乃	2015－2018	●
応援の人類学――政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌	丹羽 典生	2015－2018	
グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究	松尾 瑞穂	2015－2018	
驚異と怪異――想像界の比較研究	山中 由里子	2015－2018	
課題2：本館の所蔵する資料に関する研究			
博物館における持続可能な資料管理および環境整備―保存科学の視点から	園田 直子	2017－2020	
物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究	縄田 浩志	2016－2019	●
チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究	長野 泰彦	2015－2018	

◎若手

研究課題	研究代表者	研究期間（年度）	
課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究			
モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相	八木 百合子	2017－2019	
消費からみた狩猟研究の新展開―野生獣肉の流通と食文化をめぐる応用人類学的研究	大石 高典	2016－2018	●
テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究	平田 晶子	2016－2018	●

研究成果の公開──最近開催されたシンポジウム等から

公開セミナー

「渡り鳥と人とのかかわり──北東アジアから考える」

日時: 2018年2月11日(日)
場所: 国立民族学博物館
主催: 国立民族学博物館、NIHU基幹研究プロジェクトネットワーク型北東アジア地域研究

我々人間は、国境の存在を前提としながら政治や経済、資源の問題を議論する。国境はときに人の往来を妨げ、紛争の現場にもなる。しかし、そんな境界を気にせず、自由に移動する動物もいる。渡り鳥である。

本セミナーでは、渡り鳥に注目し、鳥と人間との共存のあり方を考えた。セミナーでは、まず池谷和信(本館教授)が北東アジアにおいて渡り鳥文化の研究が進んでいないという問題を提起した。その後、今井友樹監督の映画「鳥の道を超えて」を鑑賞し、日本で失われた鳥猟文化の理解を深めた。つづく講演では、樋口広芳(東京大学名誉教授)が渡り鳥の飛行ルートに関わる最新の研究成果を紹介し、生息地保全に向けた国際協力の重要性を指摘した。また、卯田宗平(本館准教授)は渡り鳥であるウミウの捕獲技術を継承することの難しさを示し、鵜飼を下支えする技術文化への理解が重要であると指摘した。総合討論では、渡り鳥文化のなかでの日本の特異性や鳥類学と人類学の協働のあり方が示された。本セミナーは、鳥をめぐる人間文化の多様性とその保護を来館者とともに考えるよい機会となった。

シンポジウム

「The Personal and the Public in Literary Works of the Arab Regions」

日時：2018年3月24日(土)～25日(日)
場所：国立民族学博物館
主催：NIHU基幹研究プロジェクトネットワーク型現代中東地域研究、科研費基盤研究(B)「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化」(研究代表者・西尾哲夫)、NIHU基幹研究プロジェクト機関拠点型フォーラム型情報ミュージアムの構築「中東地域民衆文化資料コレクションを中心とするフォーラム型情報データベース」
企画：西尾哲夫・鷲見朗子(京都ノートルダム女子大学教授)

現代中東地域研究民博拠点は、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業・現代中東地域研究の中心拠点として他の4大学拠点とともに大型国際共同研究を推進している。本シンポジウムでは、同事業の中心研究テーマ「地球規模の変動下における中東の人間と文化──多元的価値共創社会をめざして」に沿い、アラブ地域の文学作品、とくに詩における個と社会の位置づけと形成を探究した。文学作品はアラブ社会と共同体の形成と解体において、重要な資源あるいは要素を担ってきた。とりわけアラブ詩は、アラブ地域の社会規範や構造の根幹をなすうえで中心的な役割をはたしてきたといえる。本シンポジウムでは、アラブ古典詩研究の泰斗であるスザンヌ・ステケヴィチ(ジョージタウン大学教授)による「古典と現代アラブ詩における私的・政治的インターフェイス」と題する発表をはじめ活発な議論がおこなわれ、アラブ地域の文学を通して、個と社会の多様な交渉によって生じる調和と対立を浮き彫りにすることで、多元的価値を見いだしていく新しい手法や観点を提示した。

開館40周年記念シンポジウム

「民族誌コレクションの役割とその未来──人間の理解にむけた博物館の挑戦」

日時：2018年3月25日(日)
場所：国立民族学博物館
主催：国立民族学博物館

本シンポジウムは、開館40周年記念特別展「太陽の塔からみんぱくへ」の趣旨に鑑み、人間という存在を探究する人類学の役割、人間を理解するための対話の空間としての博物館、それを支える民族誌コレクションの意義を考えることを目的とし開催した。

基調講演には、東京大学教授、静岡県立美術館長である木下直之氏をお招きし、人間とむき合う場所たる博物館の挑戦と未来を展望するためのコレクションの可能性について講演いただいた。その後、野林厚志(本館教授)による日本万国博覧会世界民族資料調査収集団(EEM)と人類学博物館についての発表、丹羽典生(本館准教授)によるEEMのオセアニア収集の背景や、アートと人類学をめぐる博物館の営みについての発表をふまえ、上羽陽子(本館准教授)を総合司会とするパネルディスカッションを行った。そこでは、博物館と美術館との接点、民族誌コレクションの意義が議論され、とりわけ、コレクションをつねに検証し、その成果を収集や調査、研究、展示にたえずフィードバックしていくことの重要性が結論づけられた。

みんぱくのうごき

NEWS

研究部の人事異動

・印東道子教授は3月31日付けで定年退職し、4月1日付けで名誉教授となりました。
・横山廣子教授は3月31日付けで定年退職し、4月1日付けで名誉教授となりました。
・飯田　卓准教授は4月1日付けで、学術資源研究開発センター教授となりました。
・寺村裕史助教は4月1日付けで、人類文明誌研究部准教授となりました。

機関研究員の着任(4月1日付)

・神野知恵　［学術資源研究開発センター］専門は民族音楽学。主な研究地域は韓国、日本。民族音楽と民俗芸能をテーマに研究しています。
・末森　薫　［学術資源研究開発センター］専門は保存科学、中国仏教美術史等。博物館資料の保存・活用に関する実証的研究、中国甘粛省の仏教壁画研究に取り組んでいます。
・古川不可知［学術資源研究開発センター］専門は文化人類学、ヒマラヤ地域研究。主な研究地域はネパール東部のソルクンブ郡。山岳観光と「道」をテーマに研究しています。

機関研究員の着任(5月1日付)

・大澤由美　［学術資源研究開発センター］専門は食の人類学、民族植物学。味のグローバル化について、とくにうま味、グルタミン酸ナトリウムに着目し、イギリス、日本、タイで研究をしています。

シンポジウム等

◆ 国際シンポジウム「ラテンアメリカにおける過去の価値と利用──先スペイン期文明と先住民族文化の資源化をめぐって」

日時：2018年3月17日(土)～18日(日)
主催：科研費新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」計画研究A04「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」
共催：国立民族学博物館

刊行物

Sedentarization among Nomadic Peoples in Asia and Africa (SES No.95).
Kazunobu Ikeya (ed.), Nov. 2017, National Museum of Ethnology.

How Do Biomedicines Shape People's Lives, Socialities and Landscapes?(SER No.143).
Akinori Hamada and Mikako Toda (eds.), Dec. 2017, National Museum of Ethnology.

『目に見えない世界を歩く──「全盲」のフィールドワーク』
広瀬浩二郎著、2017年12月、平凡社。

Structural Transformation in Globalizing South Asia: Comprehensive Area Studies for Sustainable, Inclusive, and Peaceful Development (SES No.96).
Minoru Mio, Koichi Fujita, Kazuo Tomozawa, and Toshie Awaya (eds.), Dec. 2017, National Museum of Ethnology.

企画展

アーミッシュ・キルトを訪ねて──そこに暮らし、そして世界に生きる人びと
会期：2018年6月21日(木)～9月18日(火)
場所：国立民族学博物館　本館企画展示場

受賞

国立民族学博物館 開館40周年記念企画展 アイヌ工芸品展「現れよ。森羅の生命──木彫家 藤戸竹喜の世界」 2017年美連協奨励賞(美術館表彰)受賞(2018年4月4日)

学術協定

山形大学と学術交流協定を締結(2018年2月16日)